プログラム・ノート

天崎浩二

ブラームス：スケルツォ ハ短調 WoO 2

ヨハネス・ブラームス（1833～97）は1853年9月末、シューマン夫妻を訪問する。ブラームスの才能に衝撃を受けたロベルト・シューマン（1810～56）は早速、彼に新作を書かせる算段をしている。弟子のアルベルト・ディートリヒ（1829～1908）に「ヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）がデュッセルドルフにやってくるので、ブラームスと我々でソナタを共作し、どの楽章を誰が書いたか、ヨアヒムに当てさせよう」。ソナタのタイトルは『F. A. E』（**F**rei **A**ber **E**insam：自由に、でも孤独に＝ヨアヒムの人生訓）。私的に初演されたのは、わずかひと月後のことだ。4楽章形式。ブラームスが担当した第3楽章、若々しく力強い「スケルツォ」は、現在でも高い演奏頻度を誇る。

ブラームス：6つの歌曲 作品3 より

シューマン夫妻訪問時、彼らの仲間に披露し、高い評価を得た曲集。1853年の暮れ、ピアノ・ソナタ作品1と同時に出版された。ブラームスが人生最初に手にした、自作の印刷物！ **第５曲「見知らぬ土地で」**（詩：アイヒェンドルフ）故郷の方から、赤い稲妻と雲がやってくる。でも、両親はとっくに逝き、誰も僕を知らない…。 **第６曲「リート」**（詩：アイヒェンドルフ）優しい梢よ、飛んでゆくかわいい鳥よ、峰から流れ来る泉よ、僕の故郷はどこにあるのか、教えて…（本日はチェロとピアノによる演奏）。

クララ・シューマン：ピアノ三重奏曲 ト短調 作品17 より 第1楽章

クララ・シューマン（1819～96）の周囲には、歌曲や室内楽があふれていたが、この三重奏曲（1846）は、彼女の書いた初めての室内楽曲（4楽章構成）。ヨアヒムなど、音楽家からも高い評価を受け、同時期に生まれたシューマンのピアノ三重奏曲第1番とともに、頻繁に演奏された。

ブラームス：ピアノ三重奏曲第1番 ロ長調 作品8（改訂版）

ブラームスの人生が変わった1853年、次の年には、早くもこの大規模作品が生まれている。ブラームスはクララの才能と魅力に惹かれ、尊敬の気持ちを、作品の端々で、音符（暗号のような音列）を使って表現する。ブラームスは56歳の時、この青春の作品と再度向き合っている。1、4楽章では第2主題を、3楽章では中間部を大幅に変更するなど、音楽の流れを整える。その結果、若きブラームスの一種荒削りな音楽は、バランスがとれ深みを増し、この改訂版は音楽史上、屈指のピアノ三重奏曲となった。

（あまさき こうじ・ミュージック・サプライ代表／ブラームス愛好家）